

「子どもの哲学 (philosophy for children: p4c)」って何？

p4c のコンセプト

「子どもの哲学」(以下、p4c) は、世界中で実践されている思考・探究の実践です。日本でも、学校や大学だけでなく、哲学カフェやセミナーなどで、p4c を取り入れる試みが進められています。p4c はもともと、アメリカの哲学者・教育学者であるマシュー・リップマンによって 1960 年代に開発されました。リップマンは大学で哲学の教員として教育を実践するなかで、学生たちの思考力や反省する力が弱いことを痛感し、その原因は高等教育以前の段階における教育にあると考えようになりました。そこで彼は、子どもたちをいっそう反省的で思慮深くすることを目的として p4c を構想したのです。

p4c のコンセプトは、歴史上の有名な哲学者・思想家の教えを学ぶ「大文字の哲学 Philosophy」ではなく、参加者たちがそれぞれ自分なりの思考を深める「小文字の《てつがく philosophy》」を実践する、というものです。ですから、参加するにあたって、専門的な知識は必要ありません。

輪になって座り、対話する

具体的には、p4c は、参加者が輪になって座り、問いを共有して、みんなでその答えを見つけることを目指して、考えを深めていく実践です。たとえば学校では普通、教師が子どもたちを教えたり導いたりします。そこでは、教師はあらかじめ準備された内容を分かりやすく伝え、その内容を理解してもらうことで、生徒たちの能力を伸ばすことを目指しています。ただし、生徒たちの自由な発想を伸ばすには、こうしたスタイルは向いていないかもしれません。これに対して p4c では、ファシリテーターを中心に、答えのない問い、一人では答えが見つからなさそうな問いをめぐって参加者たちが対話を行い、自分の考えを述べ、他の参加者の意見に耳を傾けることを通して、それぞれが自分の思考を深めることを目指します。ファシリテーターがあらかじめ答えを知っている、ということはありません。みんなでアイデアを出し合い、対話を進めます。こうした実践を積み重ねることによって、子どもたちの探究心や思考力、コミュニケーション能力などを育むことができるようになります。

「セーフティ」が大切

対話において一番大切なのは「セーフティ」、つまり、みんなが安心して対話に参加できることです。発言者が話をさえぎられたり、話の内容を笑われたりからかわれたりすることなく、落ち着いた雰囲気の中で考えられるようになることが重要なのです。話したい人が話せばよく、無理に発言を求められることもありません。自分なりに考えを深めることが重視されるので、ファシリテーターが最後に議論をまとめたり、結論を出したりすることはありません。

ただし、お互いが自分の言いたいことを言えば OK、ということではありません。対話の中では、発言する人は、自分の考えの理由や根拠などを示すことが促されます。参加者が自分の考えの理由や根拠を示したり、具体的な例を挙げたり、新しい疑問を述べたりすることは、対話を促進し、話し合いを深めるよいきっかけになります。

ファシリテーターは、対話が円滑に進み、みんなの考えが深まっていくようにするために、議論の司会進行役を務めます。ただし、ファシリテーターは議論を誘導したりまとめたりすることなく、自分も参加者の一人として、自分の意見や疑問点を述べたりしてもかまいません。ファシリテーターなしで対話が進んでいくようになるのが理想です。

考えるのは楽しい

対話の中で、「こういう考えもあるんだ」とか「こんなことを考えている人がいたのか」といったように、新しい発見・驚きを楽しめるようになれば、参加者たちの考えもいっそう深まっていくことでしょう。このようにして、p4c を通して、参加者たちが一つの「探究のコミュニティ」を作り、そのなかでそれぞれが自分の思考を深められるようになってもらえるといいな、と思います。またそれによって、「考えるのは楽しいし、面白い」ということに気づいてもらえれば言うことなし、です。

一人でも多くのおみなさんが、この p4c の世界に飛び込んできてくれることを願っています。Thinking is fun!!

川崎惣一 (かわさき・そういち)

宮城教育大学教授

甲南大学「子どもの哲学」ファシリテーター